

梁川高校では、5月8日（金）が1年生、5月11日（月）が2年生、そして5月12日（火）が3年生の登校日だった。学級を4人から5人の小グループに分け、時間をずらして登校するようにした。午前中だけだが、この3日間は校舎に生徒たちの姿が見られた。改めて新鮮な感じがした。心の中で「よくぞ来てくれた」とお礼を言いそうになったくらいである。

やはり、学校は生徒がいないと学校とは言えない。このような状況になると、当たり前のことに気づかされる。本校の先生方は、生徒がいなくても、家庭とまめに連絡を取り、学習や生活の状況を把握していた。その結果、今回の登校日でも体調不良により登校できない生徒が数名ただけで以前と変わらずほとんどの生徒が登校してきた。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況だが、最近では悪化していないのは確かである。伊達市及び伊達地区からの感染者は依然としていない。福島市の感染者も4月30日以降出ていない。全国的に見ても減ってきてはいる。しかし、ここで気を緩めれば、また状況が悪くなることは国民の一人一人が理解していることであろう。

本校では、来週5月18日（月）から、学校再開へ向けて教育課程内の授業を行う。学級を2グループに分け、さらに午前の部と午後の部に分ける。生徒一人一人で見ると、登校するのは2日に1回、時間は半日となる。本校の場合、学級を2つに分けることで、教室内での生徒と生徒の距離を2メートル確保することができる。

この2メートルという距離は、「ソーシャルディスタンシング」として定着してきた。スーパーやコンビニエンスストアに行っても、床に足型のマークがあり、距離をとって並ぶようになっている。このシステムにも慣れてきた。新型コロナウイルスは、感染しても症状が出ない人がいる。感染に気づかないまま、他の人にうつしてしまうリスクがあるため慎重にならなければならない。まだワクチンも特効薬もない。当分は互いに人と人との距離をとるしかない。

これは学校も同じである。実にさびしいことではある。せつかく学校にきてもコミュニケーションが制限される。授業の進め方も通常通りとはいかない。ここで大切にしたいことは、人と人の距離を保つといっても、心のつながりまでなくすことではないという点である。世界保健機関（WHO）は、社会的な関係は維持するべきだとして、「フィジカルディスタンシング」と言い換え始めた。物理的・身体的距離の確保という意味である。体と体の距離をあけるということである。

この情報は、本校の養護教諭から得ることができた。分散登校により、少人数の状態での授業ができるため、教員は通常以上に一人一人の学習状況を把握しやすくなる。授業に話し合いなどを入れることは難しいため、講義形式が多くなることはやむを得ない。その分早く進めることはできる。デメリットもあれば、かえってメリットもあるわけである。

分散登校が始まって、生徒が自宅にいる時間は長い。電話やメールなどで人とのつながりを維持することは今後も大切になってくる。分散登校により、互いに2メートルの距離があったとしても、生徒と生徒の心のつながり、生徒と教員の心のつながりが感じられればと思う。分散登校が生徒の学習保障はもちろんのこと、少しでも心のつながりを保つことにつながればと思う。